

## 選評

山柘あおい

### ギュスターヴ・クールベ<狩人のための連作>解釈の試み

本論文はクールベが 1861 年のサロンに出品した動物を主題とする 3 点の連作、《春の発情期(雄鹿の闘い)》、《水辺の雄鹿(猟犬狩猟)》、《猟犬係》について、同時代の「動物」表象をめぐる文化的コンテクストの中で解釈を試み、また、クールベの画業全体の中での位置について再検討を試みた研究である。

クールベの諸作品は、これまで「政治的なもの」と「非政治的なもの」という二つの領域に分けて論じられるのが一般的であったが、画家自身が「中立的領域」と評していた 3 点の動物画連作に隠された政治的問題意識を明るみに出そうとする。そのために 2 つの方法が採用されている。一つは、リンダ・ノックリンや T. J. クラーク以来の社会史研究である。社会主義思想をプリュードンらと共有しパリ・コミューンに参加して政治活動を行ったクールベ芸術を読み解くための基本的な手法である。もう一つは、写実主義を標榜したクールベは眼の前に存在するものをありのままに描いたかに考えられがちだが、実は絵画として表象した即物的な自然像に画家自身の似姿や心情が投影されている事を指摘する精神分析学的手法である。例えば、不揃いで傷のある複数の林檎や血を流して死んでいる鱒を描いた晩年の作品に政治犯として囚われの身となって心身ともに傷つき衰弱した画家自身の投影を見る。

本論文は<狩人のための連作>に関して第二の方法論に依拠することで、社会の中で迫害され苦悩し闘うクールベの姿が表象されていると解釈する。その論拠を示すために導入されるのが第一の社会史研究である。狩猟や狩猟画に関する先行研究を踏まえつつ、「動物狂」と呼ばれた同時代の知識人たちの言説を調査し、アルフォンス・トゥスネルの著作『動物の精神：フランスの狩猟と情念動物学』(1847 年)における「雄鹿」に関する記述が、連作の中でも猟犬に追い詰められた雄鹿を表す《水辺の雄鹿(猟犬狩猟)》や《猟犬係》の図像と際立った類似を示している事を突き止める。トゥスネルは雄鹿を権力により不当な迫害を受ける「正義の人」、「労働者」、新しい発明を生み出す「創作者」と同一視するが、それこそクールベ自身が抱いていた自己像に他ならず、その意味でトゥスネルの言説が連作の着想源の一つになった可能性があるとの新知見を提示する。この新解釈を補強するために、連作のもう一点《春の発情期(雄鹿の闘い)》や同じサロンの出品作《雪の中の狐》における「動物」表象とトゥスネルの記述が符号する事を示し、実証的裏付けとしてクールベの人的ネットワークと思想環境を精査して画家がトゥスネルの著作を参照し両者が交流していた可能性を示唆する。

本論文は、連作の解釈にまだまだ不十分な点もあるが、膨大な先行研究を踏まえた上で新しい視点を開拓し、同時代の関連文献や作品を丹念に読み解き思想的政治的人的文脈を手堅く復元しながら、作品と思想(言説)の共鳴関係を指摘した説得力のある優れた論考である。以上の理由から、山柘あおい氏に『美術史』論文賞を贈り、その努力と功績を称える。